

想像し暫し同情の眼を送らずには居られなかつた、昨晚も此處に斯うして居つたのだらう、又あすの晩も、  
「樹よ汝はこの一少年の伴侶となつて彼をして必らず幸あらしめよ」と祈つてやつた。

日月晝夜と常に序を追ふて進んで行き、且らくも止ることはない、春は往き秋は來り、又々草木の零落するの時に逢ふた、日は暮れて道遠しの感すら涌いて來る、がしかし、もつと内的生活の革命への旅をば續けて、本當の生命、それは平面的でなしに厚さも深さもある、永遠の生命を握り取るまで、努力して行かねばならない、否斯うして行くこと其のことが賦與された生命其の物へ深さを付けて行くのである。

如何に乾ききつた高原の土も、急がずに、休まずに、穿鑿して行かば、聽てはきつと泉に到達することが出来るのだ、世相に於ける個々の事件、否一草一木もわが爲めに道を傳へ、生命を深める永遠の相手である、畢竟この世界は吾等の活動の舞臺であるよと考へつゝ知らず識らずの間に家に着いてゐた。

以上は余が一昨年晩秋を追懷して記したのである、過去を追憶するやうでは、おれも年をとつたものだから、聊か淋しくもないでもない。



## 人 生 の 富

長 瀬 龍 光

富は何物かの代價である、何者かの報償として之を受くるのは、貪るべきではなくとも少くも否むべきでは

ない、されど唯富のために富を貪るのは明に賊である、神州の日本、文化の風の吹き荒むと共に此の盜賊の跋扈するのを悲しまねばならぬ、現代の日本は勞れて且貧である、國富の増進は刻下我國民の義務であらう。然し貧だからとて盜賊する權利は得られない、急務の爲めに盜賊は肯定せられない、斯くて吾々は吾々の祖先に對して辨解の一辭柄をすら有ち得ない、昔の人ば髮こそは埃だらけの結髪だつた。然し「武士は食はねど高楊枝」と揚言した、「士の子は腹が空つても餓じうない」と壯語した。奇麗に分けた輝く髮は美しい。然し現今の人士には此の半分程の氣概もない「ひもじい時の不味い物なし」と唯一の言ひ譯として他人の手から奪ひ取つても自己の口腹の慾を充たしたいのである、勿論食ふことを恥づる者は生存を恥づるものである、取つて食はぬといふところに價値の存するのではない、飢餓に處しても、取つて動かざる節操を望むのである、この儘餓えて死ぬとも、盜泉の水を呑まざる自制心が現今の人にはない、阿彌陀も金で光る世の中である、都會も田舎も、唯動くは金、物質慾を外にして現代の人々を動かす原動力はない、富は凡ての解決者である。終極の歸趣は富である、富を離れて現代の人々に倫理道德は説き難い、主義も節操も富の前には何等の權威に値しない、人として貧ならんよりは、獸として富まんとする、斯くて尙文明と言ふならば、文明なるものを咀ふべきものだ、現代は、富豪のみ獨り富の爲めに誇り、貧者亦唯此のために富豪を尊み、富豪を羨む。唯一の價値を富に置く現代の思想から考へれば敢て無理はない。其の富を有たぬ者が之を待んと焦るのも自然だが、一般が理想として追求するものを自己に於て有し、且自身自からが一般の目的であると自覺した富豪が誇り奢るのも自然である。唯其本に歸つて、富そのものが悉く尊むべく、追求すべき價値ありや否やを考究せねばならぬ、キリストは言つた、「富めるもの、天國に入るは、駱駝が針の穴を通るよりも難い」と。實に小人玉を抱いて罪ありである。情ない吾々は、動もすれば機會を求めて迄も道に反かんとする。機會の得べからざるに至つて纔に止むものである、人格の向上を後にして、多くの機會を與ふる富を先にすれば吾々は何れの時か道に反かぬ人格を涵養し得べき。せめても機會を有ち得ないのが、此の人格に達し得るまでの吾々には安全ではあるまいか。然し富が罪惡の唯一機會ではない、富に因る罪惡の機會は有ち得ない人も、貧

に因る其の機會は保ち得る。人格の未だ到らざる吾々は、富に因るも貧に因るも等しく罪の子たるを免れな  
い。されど斯くて、益々富は吾々の終極の追求物ではないことを明にする、然し理窟は然である。けれども  
悲しいことには「吾々の情意は理性の知らざる多くの道理を有つ」とバヌカルも言ふた「哲學上の議論は如  
何ともあれ、今日までは飢餓と戀愛とに依りて世界の機械は動く」とシルレルも嘖した。富によらずんば吾  
々の情意は満足しない、物質を追はずんば吾々は衣食の資をすら得ることは出来ない、之をしも追ふ可から  
ずと言ふならば明に人を驅つて木石たらしめんとするものである。飢え、凍え、而して死ぬと命するもので  
はあるまいか。吾々の努力は人格を中心とするものである、終極の追求を人格に向けんとするものである。  
須らく富の爲めに富を追求するを止めよとは要求するけれども、人格の爲めに追求する富までも否定するも  
のではない。何物かの代價として富を受くるのは正當の權利である。何物をも與へざる富の強請は盜賊の態  
度である。彼は人格の成素であり。此は人格の缺損である。

富は何處までも外的の付加物である。一時的のものである。得るも失ふも同様に偶然である。偶然的の附加  
物を得て喜び誇るのも愚だが、之を羨み此に趨るものは一層の愚である。眞に誇るべきもの、眞に羨むべき  
ものは永久にして必然たる實質の價値である。

靡爛風の下、佛を導いて祇園精舎に入らしめたのは偉々しい長者の萬燈ではなくて、見すばらしい貧者の  
一燈であつた。外容に於て優つた長者の萬燈が、貧しい一燈に及ばなかつたのは、實質に於て缺くる所があ  
つたからである。賽錢の額によつて佛の慈悲に厚薄があるならば、佛の慈悲は市井の賣店である、百萬の賽  
錢も終に半錢の喜捨に及ばない、のは稀ではない。終極の勝利は實質の價値によつて決定される。

物質欲に馴れた眼には佛の慈悲、佛の救は甚だ不安定に見ゆる。甚だ頼り難く感せられる。お題目では腹  
は膨れぬ。佛を否定せないまでも、その救は餘りに氣長いと思はれる。然し欲求のない處には努力は起らな  
い。努力なしに得る價値は迷妄である。物質を追ふに忙しい人々は始めから佛に對する渴仰がない。隨つて  
佛々に頼るの努力もない。彼等が佛を頼り難いとするのは本よりこの處である。

肥穢擔ぐにも誠心試意の努力を要する。苟も一生の歸趣を求むる上に於て、衷心の誠、渾躬の奮勵を要するのは言を俟たぬ。佛の救済を期待し得ぬと思ふのは、誠心の披歴が足りないのである。お題目で腹が膨れぬと思ふのは誠意の唱題が至らないからである。罪は佛にあらすして自らにある。物質の欲求は投機によつて満されることもある。坐して父祖の讓をも受け得る、幸にも佛の救は投機では得られぬ。佛の慈悲に父祖傳來はない。斯くて佛の加被は偶然ならずして必然である。一時ならずして永久である。外見の付加物でなく、實質の要素である。

此の實質の要素を得て、吾々の人格は大に有力たり得る。吾々はこの根據に立つて大に天下に誇り、天下に怒號し得る、往來繁き鎌倉の町、四辻の真中に立ちて、禪天魔云云と獅子吼し得た聖日蓮の慨は是である。「四海の黔首ひれ伏して霄邊の威に聲もなしてふ」時の執權を目して、「僅かの小島の主」と唱破し得た聖日蓮の誇は斯くも峻烈だつた。春稍深き東海の浪に燦く旭日に對し、唱題の聲高らかに開宗を宣した高祖の意氣は、此時に於て己に天下を呑んで居る。將軍物かは、執權物かは、衆生濟度の堂々たる軍容の前には、何物の痴漢かよく頭を上げ得たる。威武も屈する能はず富貴も淫する能はずの快心事は、之を遺憾なく我が高祖に見るのである。天下百萬の物質主義者、果してこの高祖の驥尾にだも附し得るか。悲しいかな、外的一時的の付加物を唯一とする彼等には憐れむべき小作人や勞働者の叱責よりも有力ではあり得ない。否彼等幸に此力を有し得たりと自信するならば、是れ明にカシフル丁幾の興奮に過ぎない。

物質の追求は未だし、富は吾等の目的物たるには餘りに無價値である。男子の追求は正に此の高祖の慨にある。男子の誇は之を雖れては成立しない。

